小枝（さえだ）の笛

川西葉吉

建久元年（一一九〇）の晩秋十一月、日向美々津の湊に着いた那須大八率いる軍勢は、蛇行する耳川に沿って西へ向かうこと二十五里。奥深い山中の道なき道を踏み分け、肥後国境に近い椎葉の里にようやく到達した。九州の背をなす山脈が南北に走り、そのほぼ中央の日向北西部に椎葉は位置していた。平地らしい平地は全くなく、峻険な山の中腹から裾にかけて茅葺の人家がまばらに点在していた。大八一行は、よくぞこの辺境の地まで落ち延びて来たものだと感嘆した。

落人は山の急斜面を切り開き、そこに稗と粟を植え、それを食の糧としていた。粗末な身なりで野良仕事に黙々と従事する日焼け顔の落人を見た大八は、

「これはひどい。人として生きているのが精一杯ではないか。とても討つに忍びぬ」と絶句した。

「左様ですな。これはすでに討伐したも同然。もはや弓矢を取って抗う気概はありますまい」と一人の老臣が相槌を打った。

「鎌倉の頼朝公には一人残らず打ち取ったと報告しておこう。それでよいか、重忠」

「いやはや、それがしに異存はありませぬ。若はむしろよいことを為されます。武士は必ずしも人の首級を挙げるだけが手柄ではありませんからな」

「おう。言うではないか。年の功とはそなたのことよ」と大八がからかうと、重忠は苦笑して頭に手をやった。他の者達はどっと笑った。

大八に重忠と呼ばれた男は、姓を熊谷と云い、一の谷で平敦盛を討った直実の一族の者であった。那須与一の重臣であったが、この度の日向追討には与一の計らいで、若い大八の補佐役に任じられていた。

那須大八は、屋島の合戦の折、かの船上の扇を射落とした与一の弟であった。源頼朝より平家残党の追討令を受け、この日向の椎葉まで兵を率いて来たのである。

大八は平家残党の長より恭順の誓紙を取った。初老に近いその長というのは、もとは平家公達に仕えていた六郎という名の武士であった。今でこそ日々の労働に顔を黒くしていたが、目元の涼しさはどこか都の武士らしい面影を残していた。大八の軍勢が来た当初はかなり身構えていたが、大八が討伐の意向はないことを伝えると、一転して好意を示すようになった。大八の前に現われた六郎はこう言った。

「此の度のご配慮誠にもって忝く存じ上げます。ご覧の通り、私どもはこの地に来ると同時に武器、武具一切を捨て、もとより抗戦する意志はありません。ただこの地の里人となって山を開いて耕し、稗と粟のみで糊口をしのいでおります」

「案ずるに及びませぬ。我らもこの地に来てさよう心得ました。弓と刀を持たぬ者を討つは武士とは言えませぬ。民百姓となったあなた方をどうして討てましょうや。それにしてもこの辺境の地で生きていくのは、武士以上の覚悟が必要かとつくづく感じ入っている次第です」と大八は同情を寄せるように言った。

「有難きお言葉に一同に代わって厚く御礼申し上げます。さすがあなた様は屋島での弓の名人、与一殿の弟君であります」

「いや、あれは兄の手柄にて私は傍観していただけのこと。しかしそなたもそれを知っておられたのか」

「はい。それがしは船の上で一分始終を見ておりました。弓の弦から放たれた矢の勢いと筋は疑いなく的を射るであろうと確信したほどです。なかなか見事なものでした。平家にかような技を持つ者は一人もいません。それだけ都の風に馴染んで軟弱になっていたのでしょう。武家本来の気質を失っていたのです。戦さに敗れたは当然だったといえます」

と六郎は当時を回想するように言った。

「成程」と大八は頷いたあと、

「さて私の思い違いかも知れないが、どこかの戦地でそなたを見かけたような気がするのだが……。そなたは誰(た)が公達の武士でしたか？」と問いかけた。

「それがしはすでに武士を捨てた身。もう過ぎ去りしことにて、どうか答えられぬことをお許し下さい」と六郎は頭を下げた。

「分かり申した」と大八はそれ以上を問い詰めなかったものの、平家公達のことには関心を持っていた。

「されば六郎殿。実を言うと、私は坂東の田舎者にて元々都には憧れを抱いておりました。殊に拙い歌を少々詠んでいる故に平家一門の詠み人を羨ましく思っていました。中でもその筆頭格の経盛(つねもり)公の名は聞き及んでおりました」

すると六郎は、

「ほう。経盛公のことを……」とにわかに表情を明るくした。

「いや経盛公のみではない。他に忠度公、行盛殿、それから経正殿といった方々は田舎者の歌詠みにとっては遠い存在でした。もし源平の戦さなく、私が都に上る機会あれば一度

お会いして歌の話を乞うたでしょうに」大八はいくらか無念そうな顔をして言った。
大八は六郎の前では口にしなかったが、実際は都にいた源氏の歌詠み、師光（もろみつ）を最も崇拝していた。公卿の身ながら平清盛に立ち向かった気迫は、武家に劣らぬ行状であった。その師光は平家一門の歌詠みと交流があったことを知り、あえて平家の歌人を俎上に載せたのであった。しかし武門の身で歌を詠むのは文武の道に通じ、平家の歌人に共感を寄せていたのは事実であった。
「左様でございましたか。いやはや大八様のお言葉は、あの方々の御魂（みたま）を慰むるにふさわしく、さぞ喜んでおられることでしょう」と六郎は涙ぐんでいた。

平経盛は清盛の異母弟である。大八が語っていたように、経盛は平家一門を代表する歌詠みであった。経盛は歌仲間の藤原公重（きんしげ）と特に親しくしていた。この経盛と公重の関係が、歌を通じて当時の意外な歴史的背景が浮かび上がる。これについては、この小説と無縁とはいえなくもないので触れておきたい。
そのきっかけとなったのは、室町時代の書写と思われる公重の歌の軸を目にしたからであった。歌の詞書は「前（さきの）参議経盛歌合し侍りけるに」とあり、本歌は「山の端に入日の影はさしながら麓の里は時雨てぞゆく」である。これは藤原定家撰の『新勅撰集』に入集している。ところが、公重には私家集『風情集』というのがあり、その歌の詞書は「つねもりの三位歌こひしに　時雨を」と相違しているのである。一つの歌に対して二つの詞書は通常あり得ないのだが、実は双方とも誤りではないことが判明した。ここに平安末期の歴史が垣間見えてきたのである。
この二つの詞書によって経盛と公重がある歌合に参加し、その時に経盛に乞われて公重が時雨の歌を詠んだことがわかる。同時に正三位だった経盛が「前参議」とあるように参議職を外れたという時間的推移を示している。つまり経盛が正三位だった時に公重が歌を詠み、これを『風雅集』に入れ、参議職を外れた経盛を慰撫する意味で改めて「前参議」という詞書にして歌を書き贈ったのである。
藤原公重は名門の出自であったが、官位は正四位下にとどまり、不遇だったといわれている。当時全盛を誇っていた平家一門に官途を阻まれていたからであろう。
藤原定家は『風情集』ではなく、公重が経盛に書き贈った歌を原本として『新勅撰集』に入れたのであった。
なぜこのような経緯になったかというと、平家打倒を画策して発覚した鹿ヶ谷事件と深

く関わっている。首謀者とされた源師光は清盛の命で斬首された。それが治承元年（一一七七）六月一日のことである。那須大八が師光を慕っていたのは、この事件のことであった。

源師光は後白河法皇の近臣である。この事件は背後に後白河法皇の暗躍があった可能性が強い。師光はその身代わりとなったと想像される。なお『新古今集』の代表的な女流歌人で、わずか二十歳前後で亡くなった宮内卿は師光の息女である。

さて経盛と公重が参加した歌合とは「治承三十六人歌合」をいう。この歌合には当時を代表する歌人、西行、俊成、寂連、頼政、清輔らが出席した。では歌合はいつ行われたのであろう。『国歌大観』の解説によれば、「治承三年の成立と考えられる」とある。しかしこれは史実と合わない。なぜならこの歌合に師光も加わっているからである。したがって師光の斬首の時期と突き合わせると、治承元年の一月から五月までに行われたことになる。即ち公重が経盛に歌を乞われて詠んだのもこの時期に相当する。さらに時雨の歌を詠んでいることから、一月か二月ではなかったかと推定される。

経盛が正三位に昇進したのは治承元年である。要するに経盛は歌合の直前に昇進していたのである。『風情集』の「つねもりの三位」とある通りである。だが、経盛はその参議職を短期間で外れた。これは経盛が歌を通じて懇意であった師光をかばい、兄清盛に異を唱えたと思われる。師光の罪を軽くするよう訴え出たのである。これに清盛の怒りを買い、経盛の参議職を外したのではなかろうか。というのも経盛は清盛の死後、再び参議職に復している。経盛の官位の除籍は清盛が関わっていたことは疑いない。

公重は治承二年九月に亡くなっている。そうすると公重が経盛に歌を書き贈ったのは、師光が斬首された治承元年の六月から公重が亡くなる翌年の九月までということになる。この間が詞書にある「前参議」であった。

やがて平家一門が都落ちする際、経盛は平家の歌人の歌の資料一切を師匠格の藤原俊成に託したのであった。勿論公重が書き贈った歌もその中に含まれていたことはいうまでもない。俊成は朝敵となった平家を憚り、一門の歌は全て詠み人知らずとして『千載集』に入集させた。経盛の一首、清盛の孫の行盛の四首、経盛の子の経正の二首、そして経盛の弟の忠度の一首、計八首である。忠度は戦地の一の谷から夜駈けして都に入り、俊成に歌が入撰したかどうかを問うた逸話は『平家物語』で名高い。その歌が「さざ波や志賀の都は荒れにしを昔ながらの山桜」であることは周知の通りである。けれども忠度と経正、また笛達者であった経盛の子の敦盛は一の谷、経盛、行盛は壇ノ浦で戦死した。平家一門の

歌詠みの悲劇的な最期であった。
俊成の死後、その子の定家が資料を整理していく中で、公重が経盛に書き贈った歌を見い出したのである。定家はこれをもとにして『新勅撰集』に入れたのであった。さらに定家は、平家一門の歌人の名を明らかにして経盛、忠度、行盛、経正の各一首づつを入撰させている。
公重が経盛に乞われて詠んだ「山の端に入日の影は」の歌に詞書が二つあるのは、以上のような背景があるからであった。
那須大八や老臣の熊谷重忠は坂東の武者であったが、都での出来事は鎌倉に於いてある程度人伝に聞いていたのであった。

ある日、大八は山中を散策した。山道は全て急勾配である。見通しの利く所からは山また山が高く遠く連なり、その全山が燃えるような紅葉に包まれていた。ある部分は赤く、ある部分は黄に染まり、日に照らされて目の覚めるような色彩の敷布を広げていた。この深い山々が織りなす美に大八は思わず息を呑んだ。眼下には山の間を青い耳川が細く曲がりくねって流れていた。これらの大いなる自然の景観を目にして、今の世の源氏だの平家だのという人間の小ささを感じざるを得なかった。
ふと大八は道脇の窪みに太い丸太が縦に置かれてあるのを見た。偶々《たまたま》通りがかった土地の古老にこれは何かと尋ねた。
「あゝ。これは蜂蜜を採るもんですよ。丸太をくり抜いて蓋を被せ、丸太の下に穴を開けておけば、蜜蜂が集まってきて蜜を拵えるとです」
「おう。それは知らなかった。かようなものは東国では見かけぬ」
「この辺では昔からやっとることですが……」と古老は歯の少ない口を開けて笑った。
古老が言ったように、山中のあちこちにくり抜いた丸太を置いての蜂蜜の採取は南九州独特の風習であった。これは黒潮の流れに沿う東南アジアからの伝播である。
「ところで平家の落人の様子はどうじゃ？」
と大八は話頭を転じた。
「あん人達はわしらと変わらん里人になろうとしちょるとです。何の懸念もないとですよ」
「左様か。それは良かった。我らも心おきなく帰国出来るというもの」と大八は安堵したような表情を見せていた。
「それより姫様がむぞげな（可哀想な）こっちゃが……」

「はて、それはまた何とした？」
「あん若さで高貴なお方。よか相手がこん里にはおらんとです。いっそのこと若様が夜這いでも掛けられたらどげんですか」古老はあまりにも明け透けなことを口にした。
「何を馬鹿なことを言う。私はそれがためにここへ来たのではない」大八は顔を真っ赤にして、古老の言葉を打ち消そうとした。
「いや。これは失礼なこつば言ったごたるとです」と古老は腹をかかえて大笑いしていた。
大八も照れ隠しに笑みを浮かべていた。

大八一行が椎葉の里に来てから七日程を経た夜のことであった。大八は笛の音に誘われて宿所の外へ出た。外は身震いするほど冷え冷えとしていた。冴えた星空が頭上にあり、あたりは漆黒の闇に覆われていた。その闇を貫くように高く澄んだ笛の音がこだましていた。それは美しく、また心の奥底がかきむしられるような哀しい調べの音であった。
大八は戦地のどこかで聞いたような気がしていた。あれはたしか一の谷ではなかったかと。その笛の音をまさかこの山深い椎葉の里で耳にするとは思いも寄らなかった。あの笛は熊谷直実に討たれたわずか十七歳の敦盛殿が吹いていたと聞いている。源氏の将兵は、その笛の音に平家には典雅な人がいるものよと心打たれたことであった。大八はおのずと胸が締め付けられ、目頭が熱くなるのを覚えていた。気が付くと、大八の周囲には配下の将兵が黒い人影となって、やはり笛の音に耳を傾けていた。
その翌日、大八は鶴富姫の住む館に出向いた。鶴富姫に会うと、早速こう切り出した。
「昨夜の笛はもしや姫君ではあるまいか」
「はい。わたくしが吹いておりました。平家一門の方々の霊を弔わんがため、時折吹いているのです。耳触りだったでしょうや」
「いえいえ。かような笛の音にいたく感じ入っておりました」
「あなた様からそう仰って下さり、身にあまる光栄です」と姫はぽっと顔を紅に染めて俯いた。
大八は長い黒髪と色白の鶴富に都の公達の姫を見る思いがしていた。それは坂東の武者にとって高嶺の花に等しかったのだが、その対象が身近にあることに胸が弾んだ。姫は姫で、大八の心優しさと凛々しい若武者ぶりに惹かれていた。
「笛は都で学ばれたのか？」
「えゝ。ですが、その笛はわたくしの意によって吹いているのではありませぬ。何かがわ

たくしにかく吹けと導いているのでございます」
「何と！　それは如何なることか。して姫のお父上はどなたぞ？」と大八は矢継ぎ早に問いかけていた。
「わたくしの父のことは六郎からも固く戒められており、父の名を明かすことは叶いませぬ。わたくしはすでに平家の女ではなく、この里の一人の女に過ぎませぬ。大八様、かよう思し召し下さいませ。笛はわたくしもよくわかりませぬが、おそらく亡くなった多くの平家の人達の魂がわたくしの唇と指先の働きに表れて来るのでしょう。わたくしはそれに従っているに過ぎないのです」
「されど一の谷で聞いた笛の音とよく似ているが、それは姫の笛と何か関わりがあるのか？」
「さあ。それは……」と鶴富は口ごもった。
大八は姫は何か隠していると思ったが、姫の様子を察し、これ以上のことは触れようとしなかった。それにしても不思議なことがあるものだと胸に深く刻み込まれていた。人の命はたとえ絶えても、目に見えぬ力が生きる者を突き動かせている。人の命の尊厳が笛の音に籠っていることを思い知らされたのであった。それだけに討伐を中止した判断は悔いなかったと実感していた。

それから年が明けた睦月、頼朝公が追討の旨は了解した故、帰国するよう兄与一からの達しがあった。椎葉に来た当初、大八は重忠に報告の虚偽を語っていたが、実際は討つに忍びぬ実情を率直に書状にしたためていた。頼朝はそれを承認したというのである。
大八の軍勢は椎葉を引き上げることになったが、大八には一つ気がかりなことがあった。それは鶴富が大八の子を身籠っていたことである。
「この大八、いよいよ帰国致すが、姫も是非同行してくれぬか。子は鎌倉で育てたい」
「それはなりませぬ。わたくしは一落人の身。鎌倉でわたくしが平家の女であったことが知れ渡れば、あなた様や子に災いが生じましょう。わたくしはここの里人とともに生涯を終えます。生まれてくる子はわたくしが立派に育て上げますので、ご案じなさいませぬように。この子にはあなた様の那須の姓を賜わりとう存じます。わたくしもお別れするのはとても悲しゅうございますが、どうか忘れ形見としてこの笛をお持ち帰り下さいませ」と鶴富は涙を袖で拭いながら笛を手渡した。
大八は鶴富の決然とした口調に返す言葉はなく、ただ鶴富の手を取って深くうなだれて

いた。

こうして大八は後ろ髪を引かれる思いで、椎葉をあとにした。美々津の湊へ引き返す途中、老臣の重忠が大八のもとへ近付いて来て小声で言った。

「若は御存知でありましたか」

「さて、何のことだ？」

「いや、あの六郎とかいうご仁を」

「六郎殿がどうかしたのか」大八は怪訝そうな面持で聞いた。

「もうこの場だから申しますが、あの六郎殿はかって経盛公に仕えていた武士にございます。名を奥田六郎兵衛貞次といゝ、都では名負うての太刀の使い手だったとの評判です。平家都落ちの折には経盛公の指示で最後まで都に残り、一門の方々の歌の資料を皇太后宮大夫（俊成）様に届けたのもあのご仁と聞き及んでいます。一の谷では馬上豊かに次々と斬り伏せていく姿をそれがしは目にしております。その六郎殿が椎葉に落ち延びていたとは……。若には告げませなんだが、それがし肝を冷やしましたぞ。それにしてもよく弓刀を捨てたものですなあ。落人の成り行きを一身に負った気骨は大したものです」

「そうであったか。一見物腰は柔らかであったが、道理で何か芯がありそうだと感じていた。経盛公の話に明るい表情をしていたのもそれがためであったか……」と大八は感慨深そうに言った。そしてふと思い出したかのように、

「そういえば、鎌倉へ来られた円位（西行）様に私は歌を学んだ一人なのだが、この方は三十六人の歌合に出席したとか仰っていた。その時に経盛公と公重公が親しくされていたと語っておられた。藤原一門と平家一門が交わるのも歌の力であると。また師光卿の斬首に経盛公は反対して清盛公を諌めたのも歌のつながりによるものだと強調されていた。それで経盛公は正三位を外されたとか。その経盛公らが都落ちの時に、歌の資料を皇太后大夫様に持参したのはその六郎殿だったのか」

「いかにもその通りで」と重忠は頷いたあと、さらに問い重ねていた。

「あと一つ。若君とよい仲になられた鶴富の姫は誰が姫とお思いで？」

「さあ……」

「若も呑気なお方ですな。ま、若い者同士。それはそれでよいのですが、あの姫は経盛公の姫君ですぞ」

「何と！　それはまことか」

「それがしが若にお仕えする前に耳にしたのですが、経盛公は壇ノ浦で入水する際、六郎兵衛殿に若い姫の行末を案じられて何処かへ落ちるよう命じたそうです。そこが椎葉だったのですなあ。今若がお持ちの笛は、かって鳥羽上皇様より笛の名人であった忠盛公が拝領したもので、小枝の笛という名の由緒ある笛と思われます。同じく笛達者であった経盛公の三男、敦盛公に譲られたと聞いております」

「あゝ。鶴富姫は経盛公の……。姫は何も語ってくれなかった」と大八は驚きのあまり、小刻みに身体を震わせていた。そして懐から錦袋を取り出し、その中の笛を手に持って、しみじみと見入っていた。

「しかし、どうしてその笛が姫のもとに？」

「それは敦盛公を討った直実がその笛を見い出し、義経公に差し出していきさつを話したのです。義経公はこれを憐み、経盛公に笛を返されました。経盛公は落ち行く鶴富姫に笛を渡され、相伝するよう託されたのではないかと。さてもその笛を若君が持つに至るのは不思議な縁というより外ありません」

「今私が手にしている笛は、かようないわれがあったのか。何と勿体なきことよ」と大八は溜息まじりに言ったあと、笛を目の前のして一礼し、丁重に錦袋に収めた。

「一の谷で聞いた笛は、やはり敦盛殿が吹いていたということか」

「左様で。鶴富の姫はその敦盛公の妹君に当たられます」

大八と重忠は耳川の急流をしばらく眺めながら、小枝の笛の数奇な流転に思いを馳せていた。

那須大八は、鎌倉へ帰る途次、琵琶湖の竹生島に立ち寄った。宝厳寺に参詣し、支障なく追討の任を終えたことを報告した。そして鶴富姫と生まれてくる子の無事を祈願した。その時に鶴富姫から与えられた笛を献納した。

後世になって、安土城にいた織田信長は竹生島に伝来する笛を所望した。平家の後裔を自認していた信長は、その哀切に富む笛の音においおいと泣いたという。それが小枝の笛であったかどうかは詳らかではない。

ちなみに今日、椎葉を含めた宮崎県北部には那須の姓を持つ人が多い。その人達は那須大八と鶴富姫の子孫であるという伝承を有している。

完